

平成 30 年度 第 1 回 学校運営協議会 議事録

1 日 時 平成 30 年 7 月 14 日(土) 10:00 ~ 12:00

2 会 場 神奈川県立横浜清陵高等学校 会議室

3 内 容

- (1)開会
- (2)学校長挨拶
- (3)出席者紹介・教職員自己紹介
- (4)横浜清陵高等学校運営協議会および部会の設置について
- (5)学校運営協議会 会長・副会長 選出
- (6)学校教育計画・学校評価・学校目標等について
- (7)質疑応答及び意見交換
- (8)閉会

【学校運営協議会委員】

芥川 綾子	横浜市南区福祉保健センター こども家庭支援課 清水ヶ丘保育園 園長
大久保 敏治	一般社団法人 みなと横浜改造市民会議 理事長
岡明 秀忠	明治学院大学 文学部 教授
士野 顕一郎	株式会社 浜銀総合研究所 地域戦略研究部 部長
篠崎 孝子	山手学院中学校・高等学校 理事長・学院長
田邊 克彦	元 神奈川県立総合教育センター 所長
坂本 明子	横浜清陵高等学校 PTA 会長
田中 顯治	横浜清陵高等学校 校長

議事

- (1) 開会
- (2) 学校長挨拶

コミュニティ・スクールは従来の学校評議員会に代わり、本年度より前倒しで実施されました。学校運営協議会では、学校の運営を協議し、協働で地域と連携することをすすめていきます。アメリカ型のコミュニティ・スクールにある、予算・人事のガバナンスについては、今後の課題であると思います。

今回は年度末の学校評議員会で示したように、学校側が決めさせていただいた評価報告・計画をもとに進めさせていただきたいのです。年度末には、次年度にむけて協議し学校づくりに参画していただければと思います。本日は、今後の本校のありかたに関して、ご意見をいただければ幸いです。

(3) 出席委員紹介・教職員自己紹介

出席委員の紹介

芥川 綾子	横浜市南区福祉保健センター こども家庭支援課 清水ヶ丘保育園 園長
大久保 敏治	一般社団法人 みなと横浜改造市民会議 理事長
岡明 秀忠	明治学院大学 文学部 教授
土野 顕一郎	株式会社 浜銀総合研究所 地域戦略研究部 部長
篠崎 孝子	山手学院中学校・高等学校 理事長・学院長
田邊 克彦	元 神奈川県立総合教育センター 所長
坂本 明子	横浜清陵高等学校 PTA会長
田中 顕治	横浜清陵高等学校 校長

横浜清陵高校職員より自己紹介

副 校 長	坂本 宏明				
教 頭	西海 達也				
総括教諭	中西 宏光	(企画広報グループGL)			
総括教諭	高椅 伸行	(学習支援グループGL)			
総括教諭	池田 玲	(生徒支援グループGL)			
総括教諭	木下 教子	(生徒指導グループGL)			
総括教諭	高村 正満	(管理運営グループGL)			
教 諭	飯田 純友	宮崎 貴美	船田 弘子	(企画広報グループ)	

参加者:計 18 名

(4) 横浜清陵高等学校運営協議会および部会の設置について

資料 「神奈川県立学校における学校運営協議会の設置等に関する規則」に基づき、中西総括教諭(企画広報GL)が概略を説明しました。

学校運営協議会の構成員は、校長、保護者代表、企業関係者、大学関係者、学識経験者、近隣保育園園長、近隣私立高校理事長、一般社団法人理事長(8名)とし、任期を2年とします。

任務は、学校運営の基本方針の他、学校運営に対する校長又は教育委員会に対する意見及び教職員の任用に関する教育委員会に対する意見を具申するものです。

本校では、部会として学校評価部会、キャリア部会を置き、運営協議会委員は、評価部会委員を兼ねます。12月・3月には評価の面で基本方針の策定にご尽力いただきたいです。

会議の結果は、学校ホームページに議事録を掲載します。

(5) 学校運営協議会 会長・副会長 選出

資料 「神奈川県立学校における学校運営協議会の設置等に関する規則」の規定に基づき、次のとおり選出されました。

会長 岡明 秀忠

副会長 田邊 克彦

(6) 学校教育計画・学校評価・学校目標等について

資料 - 1「平成 29 年度 学校評価報告書」に基づき、坂本副校長から次の通り説明を行いました。

学校教育計画・学校評価は、本年度については、既に県へ提出済みなので、初年度に限っては申し訳ありませんが、次年度以降の改善方策に生かしていきたいのでご意見をうかがいたいと考えています。これまでの本校をご存じの委員の方々であるので、学校評価・学校目標を横断的に述べさせていただきます。

本校は昨年度、全日制普通科の高校として再編されました。生徒一人ひとりの学習や進路等の目標の実現に際するため、教育課程は、共通教科・科目を中心に、生徒の特性や地域・学校等の実情を踏まえながら、普通科として適切な編成を行っています。これまで、総合学科として、個性に合った進路選択を指導してきました。単位制普通科への移行にあたり、総合学科とは違う視点もとり入れ、教育課程・学習指導では、生徒の学習意欲を高め、進路実現に応じた教育課程編成をしていきます。

平成 30 年度で総合学科と単位制普通科が混在できるように、教育課程の編成及び年次進行型に対する教務規定を制定するとともに、平成 30 年度の教育課程及び総合学科と普通科のカリキュラムについて検討しました。その結果、平成 29 年度入学生の 3 年次教育課程の見直し及び平成 30 年度生の 2 年次・3 年次教育課程の見直しが行われました。しかし、新指導要領の改訂がせまり、これ以上の大幅な改編というわけにはいかない状況です。

授業改善では、事前研修会を行い、研究授業・研究協議を実施しました。生徒による授業評価の分析が大幅に遅れたため、教科・教員へのフィードバックが不十分になってしまいました。新しいスタイルの研究授業を行うことで組織的な授業改善を進めました。授業スタイルのアクティブラーニングでは、具体的な取り組みを積み重ねています。

在県外国人生徒の支援体制については、はじめての取り組みでした。支援チームをたちあげ、会議を定期的に行い、在県外国人生徒の抱える問題の集約と共有を行いました。在県の取り出し授業の担当で会議を行い情報の共有を行いました。

生徒指導・生徒支援については、基本的な生活習慣の確立、遅刻防止指導や身だしなみの指導等を行い生徒の規範意識をそだてています。支援の必要な生徒の課題解決や遅刻指導・頭髪指導を予定通り実施し、生徒の生活習慣改善に成果を上げることができました。しかし、自主的な自律的な態度をもう少し持たせたいと考えています。

ソーシャルワーカー、カウンセラー、ケース会議、生徒情報交換会などで、校内での情報の共有を進めるとともに、必要に応じて外部の支援機関とも連携して繋げ、教職員全員による指導体制をつくっています。

進路指導・支援に関しては、これまで、総合学科の多様な科目を特色にすることで、自由多様な時間割を組むことができていました。現在、単位制普通科に移行する中で類型化がすすめられており、また、卒業に必要な単位も 84 単位としました。「ただやらされている」感を持たせず、進路との結びつきをしっかりと意識させたいと考えています。

なお、本年度の進路関係に具体的な数値目標がないのは、決して目標のトーンダウンということではありません。

適切な進路情報の提供については、外部テストの実施により、通常の学習で足りない点に生徒自ら気付かせることができました。外部の実力テストの回数増と GTEC 実施を中心にして、進路指導の改善を行い、きめの細かな指導を行っています。

地域との協働の取り組みについてです。もともと、南区はボランティアがさかんな土地であるのですが、本校在校生に地元の子供が少なく、長期休業中の定期券の期限が切れる等の関係もあり、ボランティアへの参加は低調であるようです。その中でも、ケアプラザや保育園ボランティアなど地域貢献活動の充実をはかってきました。普通科になりボランティアが減ったのは、進路との関連が深いとも考えられます。

学校運営では、会計管理など事故防止につとめたいと考えています。また、近年、若い教員が増えてきたこともあり、初任者・二校目の教員に対して学校としての教育力をつけていきたいと考えています。

以上、逐条的には触れませんでした。昨年度の取り組みを総括し、本年度のさらなる取り組みにつなげたいと考えています。

(7) 質疑応答及び意見交換

(土野委員)

指示待ちの子どもが増えたというのが気になります。ここ数年、取り組みに「規範意識の育成」が強調されてきましたが、ともすればそれが「怒られないようにしよう」という感覚になりやすいのではないのでしょうか。

生徒像の総合学科からの大きな変化を感じますが、自分で考えるという感覚が薄れているのではないのでしょうか。しめるところと放任するところのメリハリが大事だと考えます。

(田中委員)

先日、体育祭前の土曜・日曜に、三年生を中心に自主的に準備している姿を見ました。三年の指導力が素晴らしく、みな熱心に準備に取り組んでいました。

キャリア部会でも、自発的にどう取り組ませるかが課題としてあがっています。総合学科1・2期生は、学校をつくらうという意欲がありました。高大接続改革でも、そのような学生が目指されています。教育課程の選択でも、単位制のなかで自主性や自己決定力を身に付けさせたいと考えています。

(学校)

ボランティアが減ったというのには、希望者の意識の変化があります。3年生には、保育という進路意識からボランティアを行う者が多いのですが、1・2年の意識の変化は、「進学型」とよぶべきでしょうか。部活動紹介で、部活動の取り組みがポートフォリオとして調査書にも記載されるだろうという説明を受けたからか、部活動入部者が増えました。

総合学科に意識的に入学したという生徒が減り、リーダー的なタイプの生徒が減ったように感じます。

(大久保委員)

今後の世の中の動向と教育方針の関係はいかがでしょうか。少子高齢化で、日本の終身雇用制が立ち行かなくなり、有名大学へ進学すればいいという価値観がとまらない世の中です。グローバル化の中、さまざまな価値観が分立しています。価値観が均一化された社会は弱いものです。

終身雇用制が終わっていく中で、今の人事課は、転職をまだマイナスとしてみえています。「自分で考え、決める」教育が必要だけれど、極端な流れにいても困るという面もあります。教育界全体で、どのような社会像をもっているのか、ビジネスに関わっている人間からするとどんな議論がされているのか知りたいところです。

指示待ちは良くないですが、意図せざる中で教育が作り出しているのではないのでしょうか。

(田中委員)

高大接続改革を文科省は「戦後二回目の大きな改革」だとしています。日本の二極化の中、どのようなカリキュラムでいくのか。AI・ロボット化は進展しても、日本の労働人口は不足するだろうと言われています。私にも先ははっきりと見えませんが、教員も教員として一生いられる時代ではないともいえます。

キャリア部会では、新学習指導要領の下、どのようなキャリア教育ができるかを考えていきたいのです。オンリーワンの清陵、本校らしさをどうつくるかが重要だと考えています。学校の教育目標は、『自主自律・自他敬愛・自立精進』です。『自他敬愛』の“他”は、“さまざまな人々・他者”でもあります。そうした国際性を身につけさせたいと考えています。

(岡明委員)

最近、大学で新学習指導要領などを教える場面でも、解説を行うだけでは成り立ちません。みんなで読み、読んでみてどう思うかが、つまり、知識をうえつけ、そして知識で何するかが大切であると考えています。情報をまとめ、発信する力です。(授業などの際にもこちらは)学ぶことのテーマを示していきます。実際、指示待ちの大学生は多いのが現状です。先生が何かを見せて引っ張っていき、楽しい体験をさせる。そしてつらいときのフォローを行う。リーダーが不在なら、できた子をリーダーとして引き上げていきます。

(本校の)授業を参観しました。2年生の英語の授業で、英語だけで授業をやり続けていくと、生徒が授業のスタイルについてくるという取り組みがありました。教員なり、誰かが柱になっていくと全体がよくなると考えます。知識をつけ、それを生かす場面・発表させる場面を、一年間の教育活動の中にどう作るかが重要だと考えます。

(田邊委員)

知識と活動、この二つをどう結びつけていくか。学習指導要領は、常に社会とのかかわりの中にあります。授業のスタイルとしての“アクティブラーニング”は、黒板に教師が向き合う授業で生徒の反応が悪いことが、授業改善を求めた結果です。なぜ反応が悪いのか。教員はみんな悩んでいます。不易・流行の揺れの中で、どう生徒に向かい合うのか、大きな転換の時期だと考えます。

目標数値の設定では、「魅力と特色づくりアンケート」の生徒の結果において、「50%以上を達成することができた。」など低い目標数値が見られたのが気にかかります。

(田中委員)

数値目標が低いのは、後退と見なされます。一番の例が大学の定員管理の厳格化の余波で、四年制大学への進学率が低下しました。前年との単純比較を避ける意味で、あえて数値目標を外しました。次年度は数値化を検討していきます。

(学校)

生徒の中から授業への意見や内容への質問が出るようになりました。生徒による授業評価でも、数値だけでなく今年度より記述式を取り上げ、細かく生徒の意見を吸い上げていきます。

今年度は、夏期講習の開講数も増え、教員の生徒の学力を伸ばそうという意識の変化もあります。

(篠崎委員)

人間らしく生きている感じは、ずっとあります。生徒は変わっていないのではないのでしょうか。

(坂本委員)

(子どもが)普通科1年目の入学者ですが、夏季講座などには積極的に参加するように言っています。総合学科のことは、わかりませんが、学習への意識をどうもっていくか、引き上げる方法を知りたいところです。

(田中委員)

模試や GTEC でも、やりっぱなしでなく、課題を見つけることが大切です。GTEC で、書く・話す力が弱いというのは、インプットが足りないからだと考えます。学習への意識でいえば、強いられた勉強ではなく、英語に自然に接する環境をつくるか。生徒にアクティブラーニングを身に付け、アクティブラーナーとして生きる力を身に付けることではないのでしょうか。

(芥川委員)

先日、保育園に生徒がみえました。子どもに興味があるようでしたが、表情は堅い様子でした。しかし、短い実習の始まりと帰りとで、あいさつと表情に大きな変化がみられました。体験のきっかけを保育園で得てくれました。

普段、園児には、生きる力・社会性、なにより自己肯定感を身につけてほしいと保育をしています。

(田邊委員)

在県の学生の入学で、学校へのよい影響や変化がありましたか。

(田中委員)

1年目は、同国人のコミュニティが出来、日本語の上達に課題を残しました。どのように日本語の上達を図ればよいのか模索しています。

(学校)

生徒をどう育てるのかという土野委員の視点は大事だと思います。保護者や地域とともに学校がどう変わったかを見ていこうと考えています。

(8) 閉会

学校運営協議会は、あと年度内二回行います。それ以外でも学校をいつでも見ることが可能です。ご意見をぜひお寄せください。

次回、12月7日は、探求発表会での生徒の活動を見ていただいた後、開催する予定です。

本日はありがとうございました。